

# 集合住宅の住戸平面計画に関する研究

—食生活とL.D.Kの構成について—

新 田 米 子・渥 美 正 子\*

## Planning the Dwelling Units of Apartment Houses

—The Relation between Residents' Dietary Life  
and Composition of L.D.K. Areas—

Yoneko Nitta, Masako Atsumi

### Summary

The purpose of this study is to clarify the relation between residents' dietary life and composition of L.D.K. areas. We conducted a survey among residents at public apartment houses in Nagoya city. The major findings are as follows:

- 1) The desirable composition of L.D.K. areas is divided by residents' life stage and their dietary life.
- 2) Young families who make a good score of "socialibility" prefer "Taimentype" units. Aged couples prefer "DK-type" units and the groups who prefer "LDK-type" units are concerned with thier dietary life highly.

Key words: Apartment house 集合住宅, Composition of L.D.K. areas LDKの構成, Residents' evaluation on L.D.K. areas LDK空間の評価, Life stage ライフステージ, Dietary life 食生活

### 1. ま え が き

今日人々の生活は多様化し、それに伴い集合住宅も入居者のライフスタイルに合った多様な住戸の供給が期待されるようになってきた。70年代以降、建築計画学の間では、それまでのわが国の集合住宅における住戸平面がnLDK型一辺倒に偏っていることを反省し、さまざまな新しい提案が示されるようになる。それは、従来のnLDK型すなわち公私分離型住宅は、プライベート空間と家族共用のパブリック空間との分離を目ざしたプランではあったが、実際には、その理念とそこで展開される人々の住生活との間にはいく分隔たりがみられるのではないかという批判に対してと、また集合住宅の個別化への対応という新しい課題から生じたものであった。

具体的には、住宅・都市整備公団（以下「住・都公団」と記す）による「KEP方式住戸」の供給、

---

\*甲子園短期大学（非）

鈴木・杉山らによる「順応型住宅」や鈴木・初見らによる「デュアルリビング」の提案<sup>1)</sup>などが主なものとしてあげられる。これらは、家族の多様化時代の対応例としてそれぞれ意義深い提示ではあるものの、現在までに供給されている公的および民間の集合住宅のより多くは依然として旧態のnLDK型住宅であるといつてよい。

これらの現象は、供給者側の問題によるところも大きいが、また一方ではある一定層の入居者には、このnLDK型は抵抗なく受け入れられる平面型であるという側面をも物語っている。しかしながら、不特定多数を対象として供給される集合住宅での個別性の対応を推し進めていくには、これまで提示された新しい試みも含め、人々の生活実態と照合しながらさらに検討を重ねる必要があると思われる。

住戸平面を大きく左右する要素は、そこで生活を展開する家族の形態（ライフステージ）であり、生活価値観（ライフスタイル）であるといえる。ライフステージによる住生活実態の分析はこれまで数多く積み重ねられてきているが、一方ライフスタイル研究は、住・都公団が80年代後半より継続的に実施している他、<sup>2),3),4),5)</sup>若干の報告が<sup>6),7)</sup>みられる程度である。今後の集合住宅計画にこのライフスタイルという視点は欠くことのできない重要な要素となると考えられるが、この場合、人々の生活を全体像として捉えることはもちろん重要ではあるが、住戸平面に最も強く影響すると考えられる生活行為を抽出して、その様式の分類を図ることも必要と思われる。

本研究は、以上の観点から、日常生活の中で大きなウェイトを占める食生活に焦点を当て、入居者の食事づくりや食生活観等を分析し住戸平面との関連性を見いだそうとするものである。本報告は、まだ予備的段階にある考察であり、主たる目的である食生活スタイルの類型化の検討までは到達していないが、入居者の食生活志向とL.D.Kの構成志向との間に若干の関連性が見いだされたのでそれを報告する。

## 2. 研究方法

名古屋市に立地する、住宅・都市整備公団の集合賃貸住宅居住者を対象に、調査票直接配布による留置自記法によって調査を実施した。回答者は、主婦もしくはそれに該当する家事担当者である。調査団地の選定にあたっては、比較的新しい計画理念に基づいて建設されたものであること、L.D.Kの形態別に分析が可能なよう、K独立型、DK型、LDK型、対面型の各住戸平面タイプが一定数得られる集合住宅団地であることを考慮した。調査期間は、1992年2月8日から16日である。配票回収状況は表1のとおりである。

## 3. 調査対象の概要

### (1) 対象団地の概要

対象団地の概要は、表2のとおりである。名古屋市中心部に近い熱田区、瑞穂区に立地し、通勤・通学の利便性は高く、生活利便施設にも恵まれている。住戸平面タイプは、住・都公団側の分類によると1DKから4LDKまで含まれる。「白鳥パークハイツ日夕野東」は、3団地の中で最も新しいため、住戸平面タイプ、住戸面積共に多様化している。一般家族世帯向けである住戸面積80㎡前後の3LDK

型, 4LDK型住戸平面が供給の中心である。1LDK型, 2LDK型住戸平面については, LD部分がフレックスルーム(入居者の希望に応じて自由に間仕切り可能な空間)として供給されているため, 調査時に, その使い方をヒヤリングした。「アーバンドウェル白鳥公園」は, 3LDK型住戸平面が, 「アーバニア滝子南」は, 3DK型住戸平面が中心となり, いずれの住戸面積も前者と比較すると若干小さい。

尚, L.D.Kのタイプ分類にあたっては, 住・都公団側が供給の際にパンフレットに表示している住戸平面タイプを, 台所の配置形態から5タイプに分類し直した。すなわち, 「K独立」型として「K/D/L」型と「K/DL」型(現状の分析では, これら2タイプを一括して扱っている), 「対面」型, 「DK」型, 「LDK」型である。以下, これをL.D.K構成という。尚, 「対面」型については, 対象住戸数が限定されていたため, 有効サンプル数が少なくなったことを付記しておく。

(2) 対象世帯の属性

対象世帯の属性をまとめると表3のようになる。家族人数は, 「4人」が32.2%, 「2人」「3人」といった小規模家族世帯が各々27.0%であり, 平均は3.2人となる。家族型は, 夫婦と子どもの「核家族」世帯(61.7%)と「夫婦のみ」世帯(25.2%)で約9割を占め, 「直系家族」は1割にも満たない。「核家族」と「直系家族」については, 長子年齢によって3段階に, 「夫婦のみ」については, 妻の年齢によって2段階のライフステージに分類した。妻の年齢は, 「30~39才」が43.9%, 「40~49才」が19.3%で平均40.2才となる。夫の職業は, ホワイトカラー層(管理職, 会社員・公務員, 専門・技術職)が約8割を占める。妻

表1 配票回収状況

	白鳥パークハイツ 日々野東	アーバンドウェル 白鳥公園	アーバニア 滝子南	計
配票数	61	30	51	142
回収数	49	22	44	115
有効回収率(%)	80.3	73.3	86.3	81.0

表2 対象団地の概要

	白鳥パークハイツ 日々野東	アーバンドウェル 白鳥公園	アーバニア滝子南
所在地	名古屋市熱田区	名古屋市熱田区	名古屋市瑞穂区
供給形式	住宅・都市整備公団賃貸	住宅・都市整備公団賃貸	住宅・都市整備公団賃貸
入居開始	1990年	1989年	1985年
総住戸数	148戸	50戸	80戸
住戸面積	44~108㎡	72~80㎡	52~94㎡
住戸平面タイプ (パンフレット表示)	1DK, 1LDK, 2LDK, 3LDK, 4LDK	3LDK	1LDK, 2LDK, 3DK, 3LDK, 4LDK
L・D・K構成	K/D/L(6戸), K/DL(29戸), 対面(8戸), DK(51戸), LDK(21戸)		
食事空間の広さ	DK, D<6.5畳>(27戸), DK<7-9畳>(30戸), LDK, DL<9-10畳>(18戸), LDK, DL<10-14畳>(26戸), LDK, DL<14畳->(14戸)		

表3 対象世帯の属性

家族人数	1人 2人 3人 4人 5人以上 AV. 3.2人	4(3.5%) 31(27.0) 31(27.0) 37(32.2) 12(10.5)
ライフステージ	核家族(長子幼児以下) 核家族(長子小学生) 核家族(長子中学生以上) 直系家族(長子幼児以下) 直系家族(長子小学生) 直系家族(長子中学生以上) 夫婦のみ(60才以下) 夫婦のみ(60才以上) その他	33(28.7) 13(11.3) 25(21.7) 2(1.7) 2(1.7) 2(1.7) 23(20.0) 6(5.2) 9(7.8)
妻の年齢	~29才 30~34才 35~39才 40~44才 45~49才 50~59才 60才~ 不明 AV. 40.2才	17(14.9) 24(21.1) 26(22.8) 15(13.2) 7(6.1) 13(11.4) 10(8.8) 2(1.8)
夫の職業	管理職 会社員・公務員 専門・技術職 技能・労務職 個人業主 無職 その他 不明	20(18.5) 51(47.2) 12(11.1) 2(1.9) 16(14.8) 2(1.9) 2(1.9) 3(2.8)
妻の職業	フルタイム パート・内職 無職 その他 不明	35(30.7) 19(16.7) 55(48.2) 1(0.9) 4(3.5)

の職業は、「フルタイム」(30.7%)と「パート, 内職」(16.7%)が併せて約半数となり, 有職・無職が二分している。

#### 4. 結果及び考察

##### (1) 現住宅の選択基準

現住宅の選択にあたって考慮した点を12項目あげ, それぞれについて考慮程度をみると, 「住宅の広さ」(80.9%), 「間取り」(76.7%), 「日当たり」(76.5%), 「通勤・通学の便」(76.5%)の4項目が高率となる。住宅の規模, 間取り, 日照条件, 立地条件が住宅選択の大きな要因であることを示している。「間取り」への重視がかなり高いことから, どのようなL.D.K構成の住戸平面を選択するかについては充分考慮されていたとみられる。また, これらの中から特に重視した上位3位までの項目を尋ねると, 「通勤・通学の便」が63.5%と最も高く, 今回は立地条件の良さへのウェイトが大きかったことがわかる。

L.D.K部分の機能性や居住性に関わる「台所の造り, 仕上げ」「室内の仕上げ」といった項目についてみると, 上位項目には位置しないものの定住志向によって異なっている(図1, 2)。全体の約半数を占める「当分定住する予定」の居住者は, 「住みかえる予定」の居住者と比較して, 「考慮した」が高率となり, 一定期間住み続けようとする人にとっては, こうした項目も, 選択時の検討項目として上がってくる傾向にある。

##### (2) 台所に対する評価

食生活様式と住戸平面との関連性を分析するのに先立ち, 食生活と大きな関わりをもっている台所

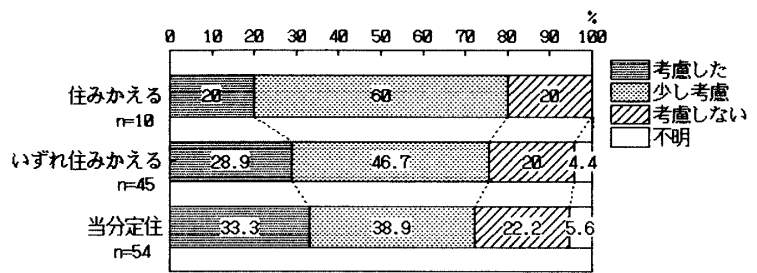


図1 現住宅の選択基準 (台所の造り, 仕上げ) <定住志向別>

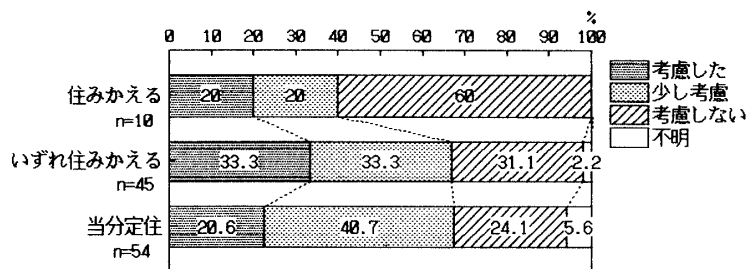


図2 現住宅の選択基準 (室内の仕上げ) <定住志向別>

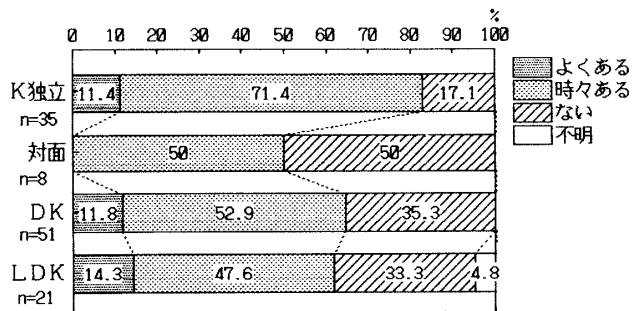
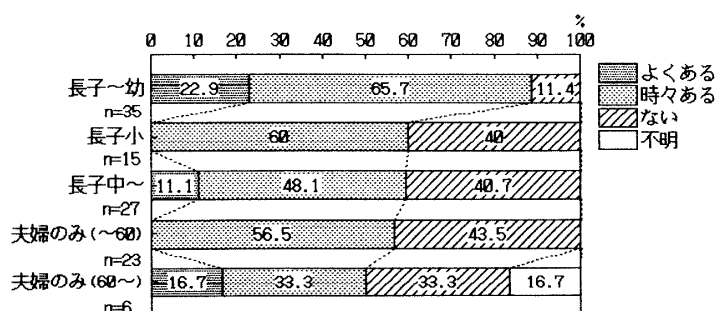


図3 台所の使い勝手 (やりにくさ) <現状のL.D.K構成別>



長子~幼:長子小  $X^2=7.768 P<0.05$   
 長子~幼:長子中~  $X^2=7.408 P<0.05$   
 長子~幼:夫婦のみ  $X^2=10.480 P<0.01$

図4 台所の使い勝手 (やりにくさ) <ライフステージ別>

(K), 食事室(D), 居間(L)空間の現状評価及び志向をL.D.K構成, 家族条件の視点から把握しておく。

まず, 台所に対する評価を, どの程度使い勝手の悪さを感じるか, その理由はどんなことによるのかによって明らかにする。現状のL.D.K構成別に使い勝手をみると(図3), 「K独立」の使い勝手が最も悪く, 「よくある」と「時々ある」を併せて82.8%になる。

「対面」は, 「ない」が半数を占め最も使い勝手の良いタイプである。これを, 妻の年齢及びライフステージ(図4)別にみると, 34才以下の若年層, また「長子幼児以下」のステージで, 使い勝手が悪いと答える比率が8割と高くなる。乳幼

児期の子どもがいる世帯では, 台所作業は特にやりにくいものであることから, 不満の程度もより顕著になったものと思われる。

台所が使いにくい理由を, 現状のL.D.K構成別に示したものが図5である。いずれのタイプも, 「窓が少ない(またはない)」「調理台が狭い」といった集合住宅特有の問題が, 共通して上位になる。「K独立」は, 他のタイプと比較して, 台所や調理台の狭さ, 窓がないことへの不満率が高いことから, 3畳程度の面積での炊事作業のしにくさ, 暑さや排気処理の問題が, より深刻であることがわかる。近年, 集合住宅では, K独立タイプが増加する傾向にあるが, 面積の拡大が伴わないと, 機能性・居住

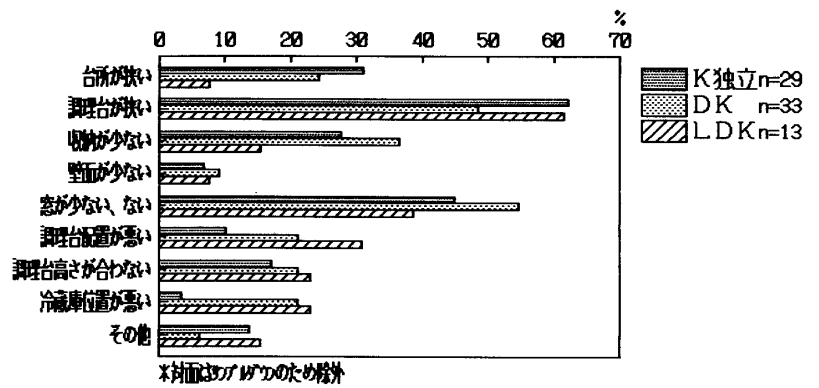
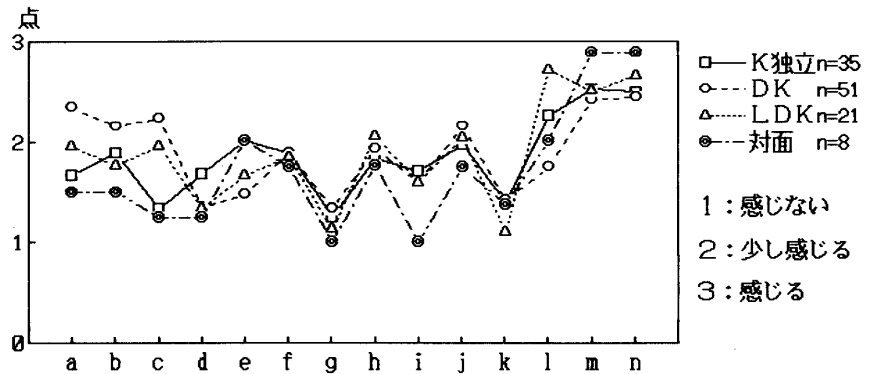


図5 台所が使いにくい理由<現状のL.D.K構成別> (多項目回答)



- a. 来客時Kが見える
- b. 食事中準備中に来客があると食べる所が見える
- c. 食事中にKのちらかりが見える
- d. 家族と話ながらK仕事ができない
- e. 幼児を見ながらK仕事ができない
- f. 複数でK仕事がしにくい
- g. 子どもや夫が使いにくい
- h. 食事中に臭いや煙がこもる
- i. 鍋物や焼き肉等がしにくい
- j. 油煙で家具や壁紙が汚れる
- k. 料理や食器を運ぶ手間がかかる
- l. D, Lが広々としている
- m. 食事が落ちついてできる
- n. 食後の団らんに都合がよい

図6 L.D.K構成について感じる事

性の向上がはかれないことを示している。同様に、「DK」も、台所の狭さや窓がないことを指摘する比率が高い。食事が団らんの中心になっている現在、大きい食卓を置き、雰囲気づくりをするためには、より広い空間を望む傾向にあることが示されている。但し、「DK」の場合、食卓を調理台として兼用することが可能なため、調理台の狭さへの不満は相対的に低下する。また、「DK」「LDK」は、「調理台の配置が悪い」「冷蔵庫の位置が悪い」といった動線上の項目に不満を示す比率が高くなることが特徴である。

(3) L.D.K構成に対する評価

L.D.K構成によって、その居住性には各々特徴をもっている。図6は、L.D.Kのつながり方によって生じる長所、短所をあげ、各項目への感じ方を3段階(感じる：3点、少し感じる：2点、感じない：1点)で捉え、平均スコアとして示したものである。「K独立」は、「家族と話をしながら台所作業ができない」や「子どもを遊ばせながら台所作業ができない」(乳幼児期の子どもがいる世帯)といった、台所に入ると孤立してしまい、家族との会話や子どもの監督がしにくいことを指摘している。「DK」は、来客時、食事中にK部分が見えるといった視線への不満が大きい。一方、「LDK」は、従来短所として指摘されてきた、接客時にK部分が見えることや<sup>8)</sup>、臭・煙が部屋全体に広がるといった問題を感じる比率は特に高まらず、むしろ「広々している」「食後

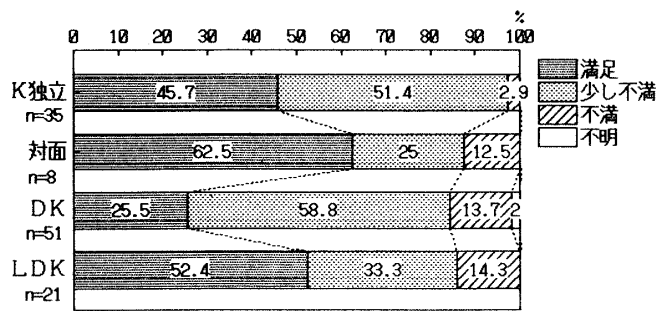


図7 L.D.K構成の評価<現状のL.D.K構成別>

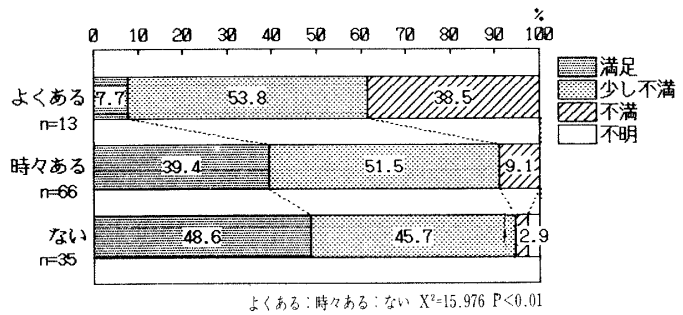


図8 L.D.K構成の評価<台所の使い勝手別>

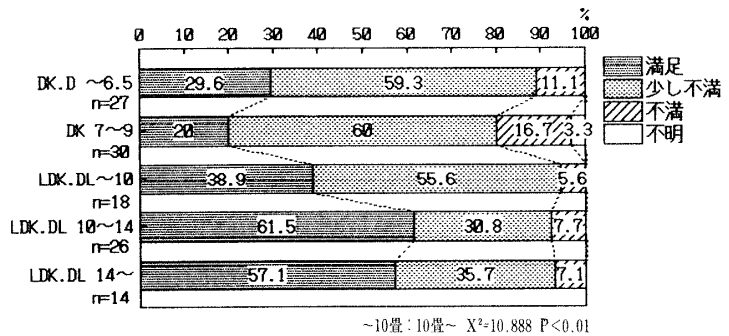


図9 L.D.K構成の評価<食事空間の広さ別>

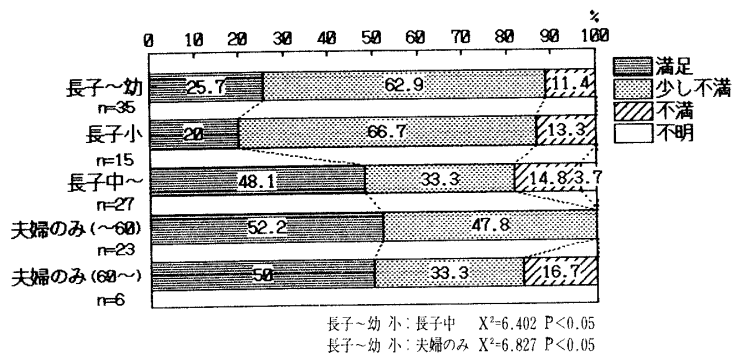


図10 L.D.K構成の評価<ライフステージ別>

の団らんに都合がよい」といった長所項目へのスコアが高いことが特徴である。「対面」は、全体的に短所項目には低スコアを示し、長所項目である「食事が落ちついてできる」「食後の団らんに都合がよい」といった雰囲気の良いことや団らんのしやすさへの評価がきわめて高い。

以上の傾向をふまえ、現状のL.D.K構成全体に対する評価を、総合的満足度として捉えたものが図7である。「満足」の比率は、「対面」(62.5%)>「LDK」(52.4%)>「K独立」(45.7%)>「DK」(25.5%)の順に低下する。「対面」にみられる満足度の高さは、前述の短所項目に対する指摘が少なく、長所項目をより高く評価する傾向を裏づけている。

こうした満足度に影響を与える物理的要因としては、まず、K部分の使い勝手が良いことがあげられる(図8)。すなわち、台所作業の際に、やりにくいことが「よくある」では、僅か7.7%の満足しか得られないが、「ない」では48.6%と約半数に達する。更に、食事空間の面積とも相関がみられ(図9)、面積の拡大に伴って満足度も高まることが明かである。特に、食事空間が10畳以上になると、過半数の満足が得られる。L.D.K構成別にみた場合、「対面」、「LDK」の満足度が高くなったのも、食事空間が自由に広々確保できるためであろう。「K独立」はLD部分の面積は広いものの、最初に述べたようにK部分の不満が高いことによって、相対的には総合満足度が低くなったものと思われる。また、人的要因としては、ライフステージとの関わりが大きい(図10)。小学生以下の子どもがいる世帯(「長子幼児以下、小学生」)では、満足が2割程度にとどまるが、「長子中学生」や「夫婦のみ」世帯になると、約半数にまで増加する。やはり、幼い子どもを目の届きやすい所で遊ばせながら、食事の準備・後片づけを行わねばならないステージ、子どもの個室が必要とならない或いは個室での滞在時間が少なく、家族の集まるL.D.K部分が生活の中心となるステージでは、L.D.Kに対する不満が高まりやすいと言える。特に、こうしたステージの層が多く居住する集合住宅では、今後L.D.K空間の面積的拡大が望まれる。

(4) L.D.K構成の志向

現状の家族条件のもとで住んでみたいL.D.K構成を、図11に示すように、5タイプの中から選択してもらった。最頻値は、「対面」(33.0%)であり、次いで「K/DL」(26.1%)が続き、他はいずれも10%

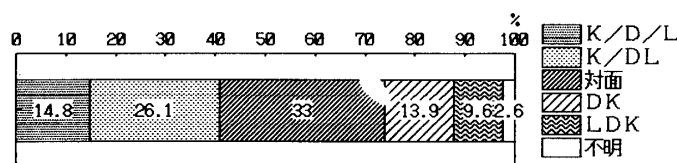


図11 L.D.K構成志向 n=115

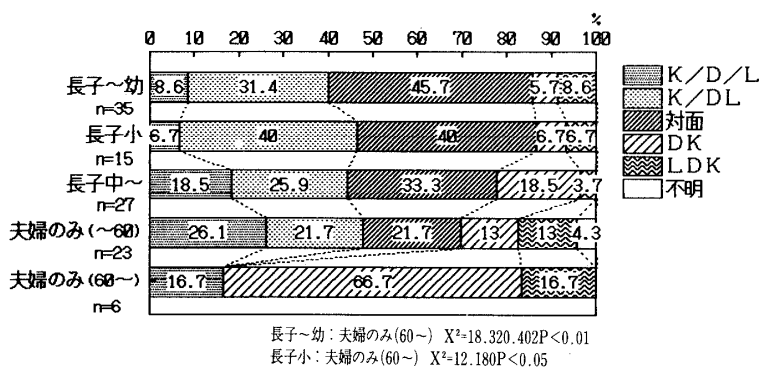


図12 L.D.K構成志向<ライフステージ別>

前後にとどまっている。

こうした志向は妻の年齢とライフステージ（図12）によって大きく異なっている。すなわち、子どもがいる世帯の志向は「対面」と「K/DL」の2タイプに分化し、更に子どもの年齢が低いほど「対面」に集中する傾向にある。「対面」志向が、「長子幼児以下」のステージでは45.7%を占め、また妻の年齢でみても20才代に52.9%とかなり高い。これは、1つには、若年層ほど新しいタイプへの憧れが強いためと思われる。更に、「対面」の優れた点として実証されている、幼い子どもの姿を見ながら台所作業ができることや、家族と団らんをしながら食事の準備・後片づけができるといったオープンタイプとしての利点<sup>9)</sup>が志向を高めていると考えられる。それに対して、子どもがいない「夫婦のみ」世帯をみると、「60才以下」では、各タイプに10~20%の比率を示し、志向が多様化する。しかし、「60才以上」の場合は、他のステージには低率であった「DK」への集中（66.7%）がみられ注目できる。こうした年代にとって「DK」は、最も長年慣れ親しんだタイプであることから新しい未経験のタイプよりも適当と考えた結果ではないかと推測される。また、「DK」がもつ調理・後片づけ作業の効率の良さという利点が、年齢が高く、家族規模が小さい世帯には高く評価されたものとも考えられる。現在、DK型住戸平面は減少傾向にあるが、ライフステージの観点からもう一度評価し直すべきタイプと思われる。

尚、妻の職業等社会的条件とL.D.K構成志向との関わりは認められなかった。

手づくり料理得点		調理合理化得点	
イ、手づくり揚げ物		ト、冷凍揚げ物	
ロ、炒め物		チ、調理済み食品の利用	
ハ、魚焼き		リ、電子レンジ料理	
ニ、手づくり菓子			
ホ、煮物			
ヘ、蒸し物	(ホ、ヘは寒い時期の頻度)		
毎日する……	5点	月1~2回…	2
週3~4回…	4	ほとんどしない…	1
週1~2回…	3		

図13 調理方法の得点化項目

調理への積極性	
・料理の本やテレビの料理番組等を見て、新しい献立を積極的に取り入れる方ですか。	
・料理をすることが好きな方ですか。	
・新しい調理器具や食器を見かけたら買いたくなる方ですか。	
健康・栄養面への関心	
・夕食は、ほぼ決まった時間にとる方ですか。	
・1日に食べる食品の数（種類）を気にする方ですか。	
・食事の摂取カロリーを気にする方ですか。	
経済性	
・一カ月にかかる食費は大まかでも記録していますか。	
・外食は控えて、なるべく家で食事をする方ですか。	
・食料品は、新聞広告等で値段を確かめてから購入する方ですか。	
インテリアへの関心	
・食器は料理にあわせて使い分ける方ですか。	
・食卓の上を、生け花や鉢植えで飾る方ですか。	
・食堂の照明や壁掛（絵、装飾品）に気を使う方ですか。	
食生活を通しての社交性	
・家族や友人と美味しい料理を食べに出かける方ですか。	
・家に友人や親戚を呼んで、一緒に食事をするのが好きな方ですか。	
・自分で料理したものを、人におすそ分けする方ですか。	
(はい=3点 どちらともいえない=2点 いいえ=1点)	

図14 食生活意識・態度の得点化項目

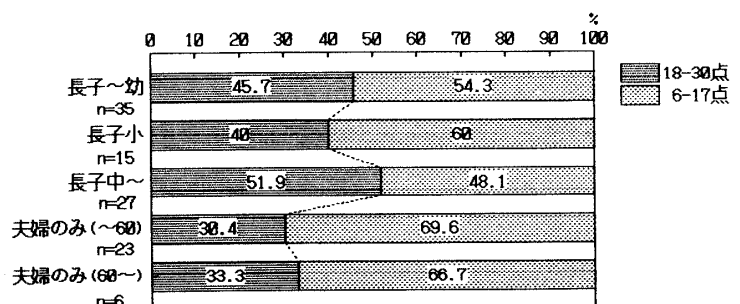


図15 手作り料理得点<ライフステージ別>



以上、L.D.K構成に対する評価、志向は家族型や子どもの年齢といったライフステージによる影響が大きいことが明らかであり、住戸平面計画においてもこうした傾向をふまえることの必要性が確認されたといえる。

(5) 食生活志向とL.D.K構成の志向

日々の食事づくりを、多くの場合その担当者である主婦がどのように実行しているのか、また食生活にどのような意識をもって臨んでいるのかを、妻の年齢・職業、家族のライフステージ、現住宅のL.D.K構成及びL.D.K構成の志向によって分析を試みた。

食事づくりの実態は、「手づくり料理得点」「調理合理化得点」(図13)「夕食準備時間」という視点すなわち、台所の使用頻度や使用設備・機器等に関する項目として取りあげた。

食生活意識・態度面では、「料理への積極性」「健康・栄養面への関心」「経済性」「インテリアへの関心」「食生活を通しての社交性」といった5つの観点(図14)から食生活志向を探ろうと試みた。

食事づくりでは、「手づくり料理得点」で妻の年齢別、ライフステージ別(図15)、妻の職業別で(図16)若干の差がみられた。すなわち「長子幼児以下」の若い家族と育ち盛りの子どものいる「長子中学生以上」で高得点となり、職業別では時間に余裕の少ない「フルタイム」で低得点が多くという傾向がみられる。

「調理合理化得点」は全体的に点数が低くつまり合理化食品の利用が少ない結

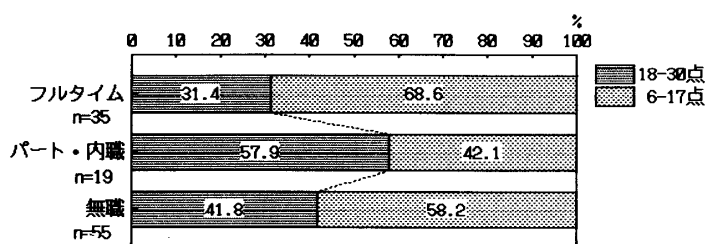


図16 手づくり料理得点<妻の職業別>

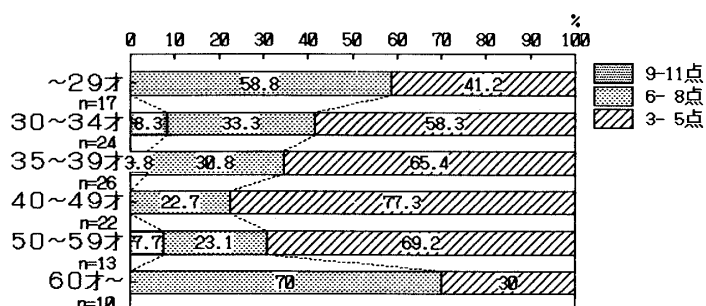


図17 調理合理化得点<妻の年齢別>

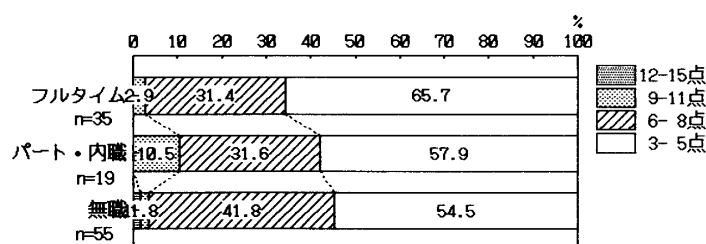
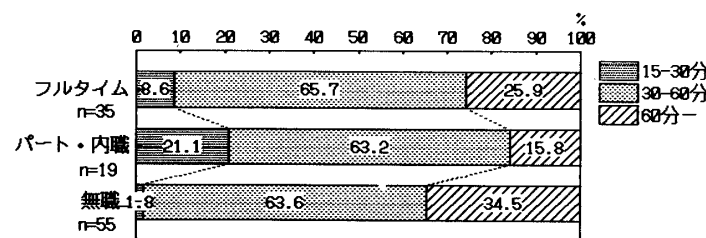


図18 調理合理化得点<妻の職業別>



パート：無職  $X^2=9.404$   $P<0.01$

図19 夕食準備期間<妻の職業別>

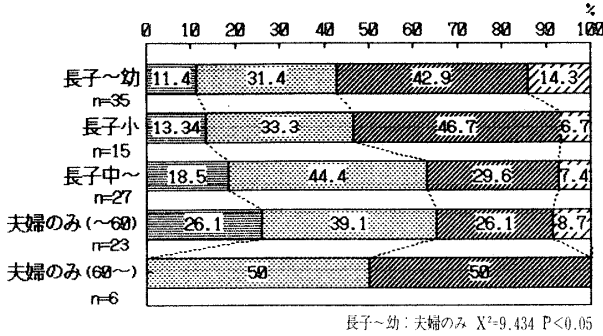


図20 料理への積極性<ライフステージ別>

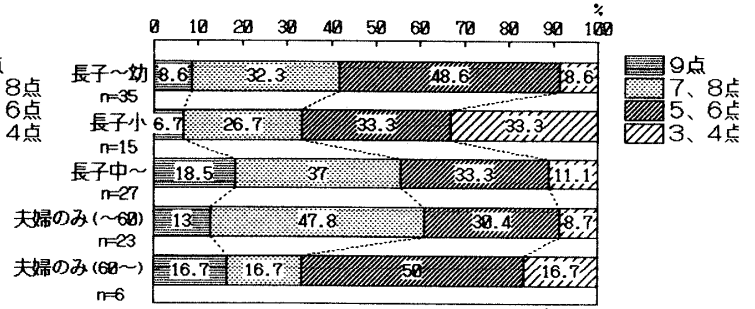


図24 食を通しての社交性<ライフステージ別>

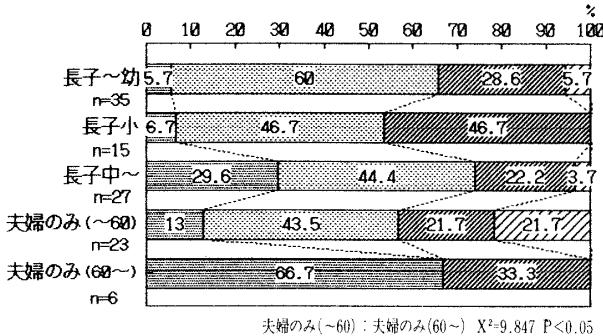


図21 健康・栄養面への関心<ライフステージ別>

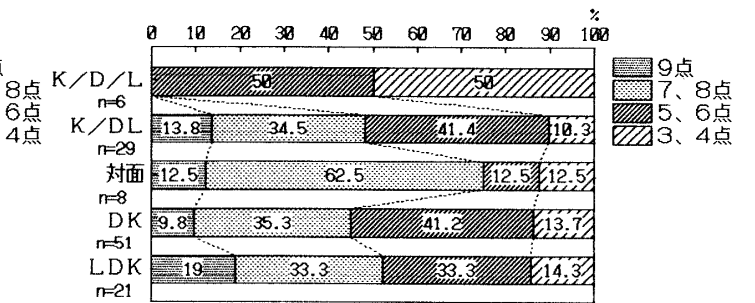


図25 食を通しての社交性<現状のL.D.K構成別>

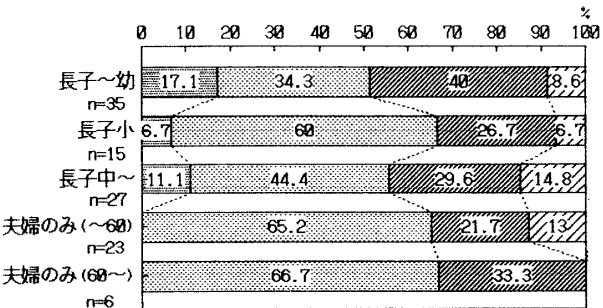


図22 経済性への関心<ライフステージ別>

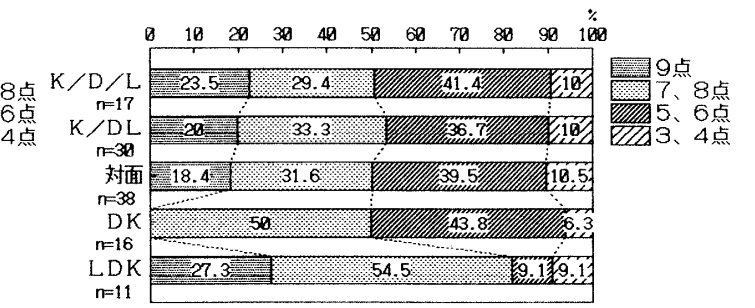


図26 料理への積極性<L.D.K構成志向別>

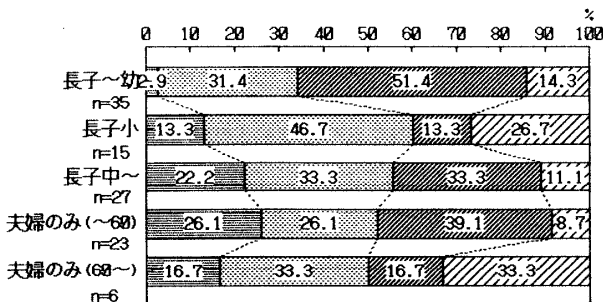


図23 インテリアへの関心<ライフステージ別>

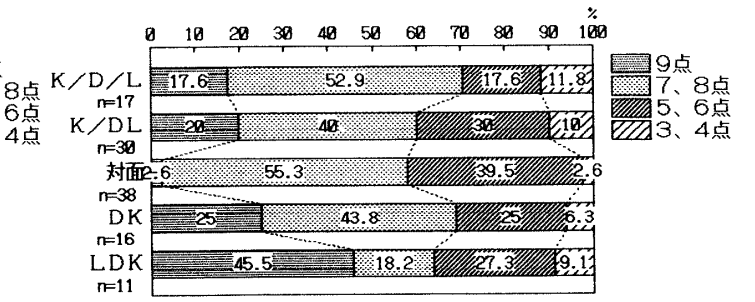


図27 健康・栄養面への関心<L.D.K構成志向別>

果となったが、年齢別では、40歳代以下の若い層で、職業別では「パート」でやや高得点となることわかる(図17, 18)。また「夕食準備時間」では、ライフステージ別で「夫婦のみ60歳以下」で「60分以上」の長時間派が41.4%と多く占め、職業別では(図19)「無職」で同様の結果がみられ、主婦の時間的余裕の程度との関係がうかがわれる。しかし、これら食事づくり実態と住戸平面の物理的条件との間に特徴ある傾向は認められなかった。

つぎに食生活意識面からの考察を述べる。ライフステージ別では(図20~24)、「料理積極性」得点は「長子中学生以上」と「夫婦のみ60歳以下」で高く、「健康・栄養面」では「夫婦のみ60歳以上」の高年齢層と「長子中学生以上」で高く、「インテリア」では子どものいない「夫婦のみ」世帯と子どもが成長した「長子中学生以上」で高くなる。また「社交性」では、やはり「夫婦のみ60歳以下」と「長子中学生以上」で高得点の傾向がみられる。このように「長子中学生以上」と「夫婦のみ60歳以下」は類似した傾向を示し、料理、インテリア、社交性といった点で積極的態度を示すライフステージ層と考えられる。

さらにこれらとL.D.K構成との関連について分析すると、現在のタイプ別でいく分目立った傾向を見せたのは「社交性」得点で、「対面」が相対的に高得点を示す(図25)。またL.D.K構成の志向別では図26~図30に示すような結果が得られた。「LDK」を志向する者は、「料理積極性」「健康・栄養面」「インテリア」「社交性」それぞれで高得点を占める。「対面」志向は、現在タイプと同様「社交性」得点が高くなる。従来型の「DK」志向は、「経済性」や「健康・栄養面」といった得点が高く堅実的な態度がうかがわれる。そして現在の住戸平面の中で最も多くを占めていると思われる「K/LD」タイプを志向する者は、「料理積極性」や「インテリア」で比較的高得点を示している。

以上今回の事例調査からは、「対面」志向の高さと各タイプごとの食生活意識の相異がある程度明らかにされたといえよう。「対面」は若い家族に多く支持される傾向にあるが、これは幼児を見守りながらの家事や家族のコミュニケーションを重視する家族であるためと考えられる。

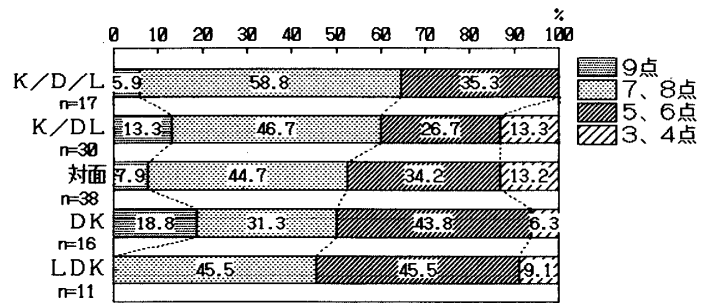


図28 経済性への関心<L.D.K構成志向別>

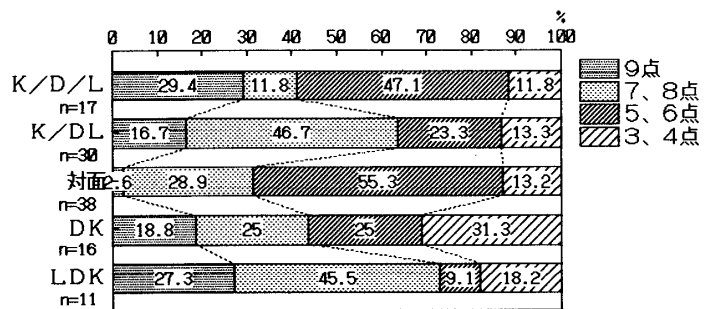


図29 インテリアへの関心<L.D.K構成志向別>

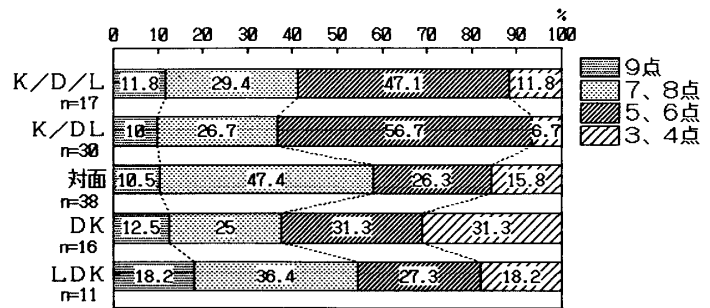


図30 食を通しての社交性<L.D.K構成志向別>

また、かつては集合住宅の主流であった「DK」の人気は下降傾向にあるといえるが、家事作業の効率性や家族の共同作業のしやすさそしてリビングルームの汚れを考慮する人には適したタイプといえ、高年齢層を中心にある一定層には今後も必要とされよう。

そして、開放的なプラン「LDK」は狭い空間をより広く感じさせるという点でより集合住宅向きの平面といえるが、台所が丸見えなためかこのタイプを志向する割合は全体の中で最も低い(9.8%)。しかしこの「LDK」志向は食生活の多方面において積極的態度を示し、注目されるタイプといえよう。

## 5. 要 約

本研究は、集合住宅の個別性への対応のあり方を模索することを目的とし、家族のライフステージや食生活志向が住戸平面の基本となるL.D.K構成の志向や台所の使い勝手にどのように影響するのかを明らかにしようとしたものである。調査結果を要約すると次のようになる。

1) 現住宅を選択する際、「台所の造り・仕上げ」「室内の仕上げ」といった住宅内部の機能性、居住性に関する項目を重視する割合は、定住志向を示す入居者程高くなる。

2) 台所に対する評価をL.D.K構成別に比較すると、「K独立」が最も使い勝手が悪い結果となった。その理由として「台所・調理台の狭さ」「窓がない」など集合住宅特有の問題が上位項目に上がっている。

3) 現住宅のL.D.K構成に対する評価を総合的満足度としてみると、満足率は「対面」(62.5%)、「LDK」(52.4%)、「K独立」(45.7%)、「DK」(25.5%)の順に低下する。この満足度は、台所の使い勝手と食事空間の面積との間で相関が大であった。「対面」はLD部分のゆとりと家族のコミュニケーションの得られやすさという点で他タイプより評価が高まったものといえる。

4) L.D.K構成志向と食生活志向の間には次の点が確認された。「対面」を志向する人は全体の33%と最も多く、特徴として若い年齢層で、また、「社交性」得点の高いグループといえる。従来型の「DK」志向は減少傾向にあるが(14%)、高年齢層で多くみられる。開放的な「LDK」は10%程度の支持ではあるが、このグループは「料理積極性」「インテリア」「社交性」「健康・栄養面」と多方面で高得点を占め、オールマイティ型の食生活スタイルを示すことが注目される。

今回の調査結果からは、入居者の「対面」志向の強さが把握できたが、今後このタイプが住戸平面の主流となり得るのか、またそれぞれのタイプと入居者の食生活スタイル及び接客観などがどのような関連性を示すのかといった点について、今後さらに考察を深める必要がある。

## 注

1) 鈴木・杉山らは「順応型住宅の研究」(新住宅普及会住宅建築研究所報 No.1, 1974.12)の中で、家族の成長に伴う生活の変化に対応できる計画の必要性を説き、間仕切りに可変性を付与することが有効であると提案。これと同様の理論にもとずいて、住・都公団は可動間仕切りを用いた「KEP住戸」を開発した(1974年)。

また鈴木・初見らは「住居における公室の計画に関する研究」(前掲所報 No.8, 1981.3)において、居間から接客機能を切り離し食事と団らん一体性のある家族主体の「ファミリールーム」と、接客の場であると同時に大人の場ともなる「フォーマルリビング」という性格の異なる二つの居間を用意する平面構成を提案している。(出典:日本建築学会編

『集合住宅計画研究史』1989年，丸善)

- 2) 加藤多加年「ライフスタイルに関する研究」住宅・都市整備公団 住宅都市試験研究所 調査研究報， No.86, 1987, PP.51～68
- 3) 加藤多加年「昭和62年度ライフスタイルに関する研究(その2)」前掲調査研究報， No.88, 1988, PP.43～56
- 4) 柳田高峰「昭和63年度ライフスタイルに関する研究」前掲調査研究報， No.90, 1989, PP.61～73
- 5) 柳田高峰「平成元年度ライフスタイルに関する研究」前掲調査研究報， No.92, 1990, PP.33～43
- 6) 田中智子「生活スタイルと超高層住宅居住」日本建築学会計画系論文報告集， 第429号， 1991年11月
- 7) 野崎薫「高額分譲マンション<アクロシティ>購入者の住意識調査」家政学研究(奈良女子大学) Vol.38 No.2, 1992年3月, PP.76～87
- 8) 山岸雅子「LDK空間に関する入居者評価」家政学研究(奈良女子大学) Vol.32 No.1, 1985年, PP.75～84
- 9) 太田さち他「キッチンとの関わりからみた団らん空間のあり方に関する調査研究(第1報)」, 「同(第2報)」日本家政学会誌 Vol.41 No.9, 1990年, PP.875～886

#### 参考文献

- 新田米子「集合住宅における幼児・児童のいる世帯向け住戸計画について」聖徳学園女子短期大学紀要第18集， 1992年, PP.91～101
- 村田昭治他『ライフスタイル全書』ダイヤモンド社， 1979年
- 住宅団地環境設計ノート編集委員会編『ライフスタイルと住宅づくり(住宅団地環境設計ノート(その8))』日本住宅協会， 1990年